

マの Karen と比較するとかなり cultural drift をおこしているようである。それは言語にタイ系の単語が混入しているだけではなく、儀礼の中にもタイ人もしくはタイ国北部に古くから定着している Lawa 族などと類似するものが目につく。

さらに Karen のタイ化の過程で人類学的に興味を引くのは仏教化の問題であろう。山地 Karen にはまだ本格的な仏教の影響は無く、animism がその信仰生活の基礎になっている。そのような状態のところにはローマン・カトリックやバプティストの宣教師が入り込んでいるけれども、ビルマのような旧植民地国家とは異なり基督教の Karen を初めとする山地民への影響は決定的なものにはなっていない。

このような山地 Karen に比べて、平地 Karen は日常仏教徒であるタイ人や Lawa 族と接触しているので、仏教の影響が大きい。とりわけ P'wo Karen においてその傾向が顕著である。しかしながら、平地の Skaw Karen もその例外ではない。もちろん、Karen の仏教⁹⁾にはいまだかなりのアニミスティックな要素が残っていることは言うまでもない。

わたくしは当面山地の S'kaw Karen の調査に専念する積りであるけれども、目下滞在して調査をしているこの山村の調査が一段落したならば、20キロメートルほど西方にある Mae Sarieng の谷において、平

地に定着している S'kaw Karen を調査するつもりである。そして、山地と平地の Karen を比較することにより、山地民の plain emulation (平地の文化を模倣すること) の過程を研究する予定である。それは平地 Karen の文化のあり方は山地 Karen の文化の変容の方向になんらかの示唆を与えると思うからである。

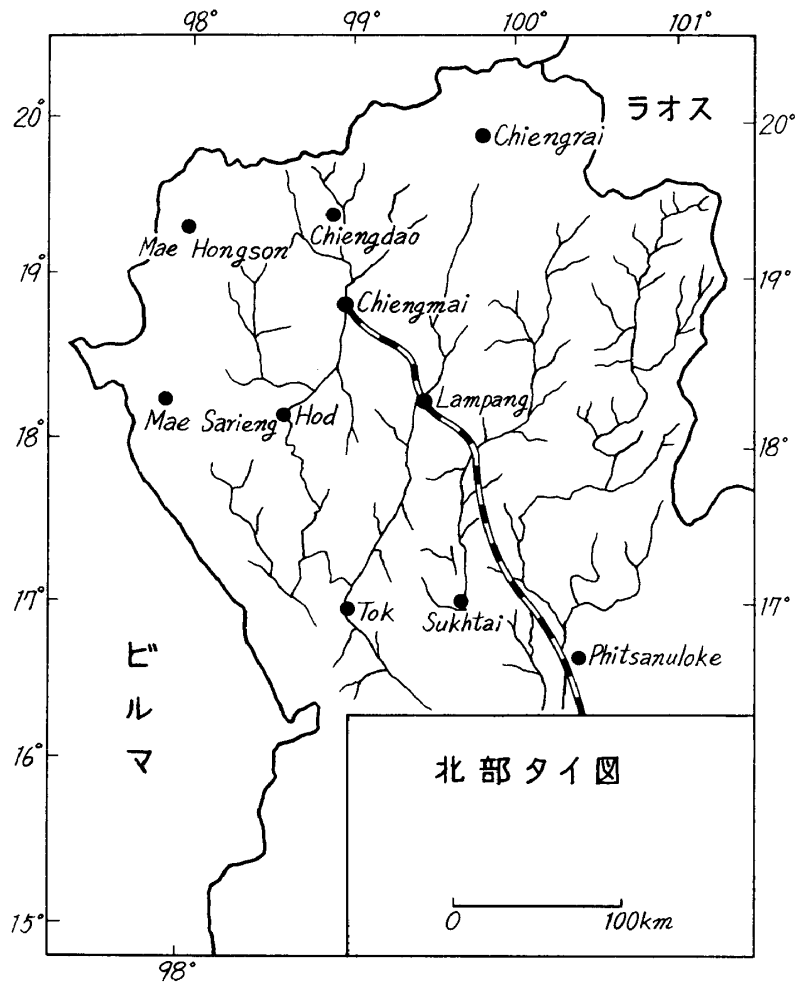
調査村 ドーン・デーン グ

水野浩一

日本を離れて4ヶ月半、バンコックの生活からも遠ざかり、また設営の煩わしさからも解放されて、ようやく調査村に定着したところである。したがって、現

在までの活動状況をも交じえながら、村の様子について記してみようと思う。

村の名はドーン・デーン グといい、バンコックの東



北部の町コーンケーンから20キロほど南に下ったところにある。開拓当時、辞書には *Xylia Xylacarpa* と見え、その葉は紅い木が多数繁茂していたところから「紅い木の茂る丘」もしくは「紅い丘」とよび習わすようになった。こうした命名法は他にも少なくなく、「丘」、「台地」、「沼沢」など地勢を示す語を前に出し、その形状を特色づける言葉や、そこに繁茂する植物、または棲息する動物の名を付して村名とする例が多数みられる。

最初にこの地方を訪れたのは6月の末であった。その目的はコーンケーンに適当な中継地を設けること、通訳をさがすこと、また村落にはいる手蔓を求めることにあった。コーンケーンは県名であるが、そこには二つの行政都市がある。一つは県名と同じくコーンケーンといい、他の一つはボンという。前者は人口2万弱、後者は5千人ばかりであるから、都市というよりは町といった方が適切だろう。両者ともその中心街が華僑経営の商店にあることは、他の町と変りない。コーンケーンの町が新興都市としての印象を与えるのはここ数年間に、官庁、公共施設や学校が改築、新設されてきたからである。しかしながら町自体の内的発展力は弱く、繁栄は中央の地方への発展として把握した方がよい。新しい県庁の建築様式は、中央の地方への進出、地方の中央への依存を象徴するかのよう、聳えている。

通訳に関しては、幸い、官庁クラブのマネージャーを勤めるかたわら、外人宣教師にタイ語を教えているという青年に出あった。学歴は浅いが、発音にタイ人特有の癖がなく、語彙もかなり豊富である。地方育ちだから純朴だし、方言に強いのもとりえである。バンコックと地方の村との間には生活様式、ことに言語や食生活が異なるから、地方育ちの通訳を雇うならば、それだけ調査期間中の生活面に伴う煩わしさを削減してくれることになるし、また価値体系の親近性のゆえに村人との接触面においても、摩擦が少ないはずである。

この地方の村人は餅米を主食

としている。蒸しあがったものを手で握って丸めながら、ナム・ブリッグをつけ、副食を添えて食べる。副食には、ラーブ・スアといい肉をつぶして唐辛子であえたもの、ラーブ・タウといい沼でとれた藻を唐辛子であえたもの、など各種のラーブがある。その他、雑魚、蟹、田螺、また筍や木の芽など自然のものを利用することが多い。「パイ・ハー・ギン」といって、食前にこれらを採集してくる。私たちの考える野菜類は町方の食物であり、村の中では手に入りにくい。特別の日を除くと、ふだんは料理に火を使うことが少なく、肉類も生を好む。肉としては水牛、牛が使われるが、これらの調理は男性が受け持つ。女性がこうした食物を料理するようになるまでには、よほどの年月が必要であるらしい。

言語もバンコックの言葉とはかなり違う。知識あるものは東北の方言だというのが、ラオだと意識している村人は多い。母音や子音に変異があるばかりでなく、語彙自体が異なる場合や、使い方の相違も目につく。ちなみに2、3の例をあげるならば、出小屋のことを中部地方では、グラトープ、北部地方ではハング、東北地方ではティアング・ナーという。中部、北部地方では、田畑1枚のことをカンナーといっているが、東北地方ではカンテーという。中部では、文の末尾に男性はクラブ、女性はカーを付して、尊敬の意を表したり、丁寧な表現法とするが、東北部の村では殆んど聞かれない。そのかわり文の末尾にポーという音が来る。しかしこれは疑問詞であり、中部ではマイという。町の人間は村人の粗野な言葉つきを軽蔑する



マ ッ ト 編



水干れ年の田植

し、村人は改まった言葉遣いを笑う。

生活の条件も通訳も見当がついたので、若干の村を訪れてみた。一つはコーンケーンの町の近くにあり、他の一つはポンの町の近くにある。このときは、村自身の性格の差異よりも、案内者もしくは村への接近の仕方における相違の方が、印象的であった。コーンケーンの場合、村への接近は単に行政組織を通じてのみであったために、村人の反応が表面的であった。これに反してポンの場合は、それ以外の社会的要因が存在していたために、よりいっそう親密な態度がみられた。ポンの町の案内者はバンコックで知りあった友人で、この郡で唯一の保健診療所勤務の医者である。若いとその能力のため、役所でも力があり、また献身的な仕事ぶりのために村人から信頼されている。しかも彼は父親が中国人であるために、華僑社会ともかなり親しい。ポンの町に中継所を設ければ、村内への接触、浸透は、はるかに容易である。しかし通訳調達上の都合から断念せざるを得なかった。

二度目の予備調査は7月19日から4週間であり、前半は村探し、後半は地図や戸籍の筆写のために費やした。県内には10の郡が存在する。そのうちの一つをムアング郡といい、17の行政区・タンボンからなっている。

行政都市コーンケーンはその中心部に位置する。予備調査の範囲としては、ムアング郡内の主要道路の沿線に限定した。さもなくば雨期には浸水のため、交通が全く遮断されるからである。第2に、仏教徒の村で米作を主要作物としていること、第3にコーンケーンの特産であるジュートを栽培している村を選んだ。また、できれば村の範囲と寺や学校の社会圏が合致することが望ましかった。

ドン・デングは自然村であると同時に、行政組織上最小の単位であり、村には村長1名と助手が2名いる。村の中央に木造の集会所があり、集会は月に1回、あとは必要に応じて催される。村長の家には、招集の合図を知らせるために、竹製の鳴物ゴローが備えられている。家屋は高床式で、比較的密集して建っているから、境界が明瞭である。その他の地所を含む村の境界線は必ずしも明らかでない。しかし、村人は一定の地域を持ち、また共同所属の感情を抱いている。村内には寺があり、近くに学校がある。寺は隣村と共有、学校は4ヶ村共同である。タイ国の村落コミュニティの定義として「寺と学校を共有する社会圏」とあるけれども、この概念規定と現実とは必ずしも一致しない。

当村は今から75年ほど前に、東方に位置するローイ



牛の料理

エットやマハーサラカムあたりから移住してきた人々によってひらかれた開拓村である。かれらは兄弟、姉妹などと共に教家族ごとに集団をなして流浪の旅を続けて到来した。最初の年はわずかな土地を切りひらいて家屋を建て、翌年は灌木を切りひらいて稲を植えた。大木は徐々にしか伐採出来なかった。開墾中、村人は米を手に入れるために種々の穫物を持って、すでに定着した村にでかけた。今では使うことのない横弓、弾き弓、

吹き矢、仕掛け罾を用いて、鹿、野豚、野鶏、兎、鳥などをとらえたという。当時の村人にとって、狩猟、採集は今日よりもいっそう重要な位置を占めていたにちがいない。

村人たちは森の精霊をビー・パーと称して畏れ、村の近くにある自然の塚に住まうものとして、これを祭った。開拓後、数年もするうちに村の戸数は40にも達したので、村内に寺を建立しウァット・ポーバンラングと名づけた。それは村の定着と繁栄を物語るものであった。それと同じ頃、村人たちは自然の塚の上にも小さな社を設け、これをトウカタープーと称して、鶏や亀を供物として捧げたという。そして村にはお守り役を1人おいた。その後数年してこの社を近くの大木に移したとき、村内の中ほどにブー・バーン（村の中



新 築 中 の 県 庁

央の意) といって木の柱を建てた。かれらは村の繁栄を願って悪霊からまもるために新しく設けたのである。これは森の霊とは異なり、仏教的色彩の濃厚な聖地として崇められている。そしてブー・バーンに祈るに先だっては、トウカタープーに供物を捧げるのが常であった。今日トウカタープーの方はすでに村のリーダーによって破壊されてしまったので、ブーバーンしか残っていない。ちなみに中部地方やコーンケーンの町では、サンブラプーミーといい、各家の入口に柱風の社を建て、家・屋敷を司どる霊としているが、それはトウカタープーの変形であるらしい。

コーンケーンへの三度目の旅行は、8月21日であった。ドーン・デング村への最初の接触や、宿泊所に関しては県庁や県役所の役人や作業員の方々に大変お



得 度 式

世話になった。しかし、まだ充分村内に浸透したとは感じられなかったので、9月1日の定着日までの間、出来るかぎり村人と接触することに努めた。毎日町から村へ通い、タムボンの集会に参加し、村内を歩き、寺の行事には寄進をし、保健所の新設には寄付をした。その間、物質文化についてたずねてみたり、ときには相手の関心にまかせて受け答えたりした。日本の動、植物、自然、農耕、作物、宗教、婚姻、家族など、かれら



ケナフの皮むき

の関心は多方面にわたり、懸命になって話を通じさせようとする努力がみられた。通訳も初めは連れて行かなかったが、彼の信仰態度や相手を思う心（アウ・チャイ・カウ・マーサイ・チャイ・ラウ）に村人と共通な点があるため、村人との接触において支障をきたす恐れは全くなかった。そして10日もするうちに、村人の中から村内居住の許可書を獲得できた。つまり結婚仲介の申し出である。

定着の最後の段階は村入りの挨拶であろう。こうした点について種々言葉を変えてたずねてみたが、一向要領を得なかった。致し方なく小牛1頭を提供して、村人を招待してみようと考えた。後ほどわかったことであるが、この村にとって村入りの儀式などは必要ではない。入村者の殆んどが婚入者であり、新入者は結婚式によって自動的に村内の社会的位置づけが与えられるからである。社会的位置づけとして重要な機能を果たしているのはやはり親族関係である。

当日は招待者の3倍以上もの人が集った。予想外の収穫は、村長をはじめ村のリーダーが調査者のために村入りの儀を営んでくれたからである。このために全く主客転倒し、調査者は村人から正式の歓迎をうけることになった。その儀礼はパー・クワンといい、村人自身は村入りの儀礼だと意識していない。クワンは頭に宿るとされている生命力ないし魂であり、生存中の人間の精神状態を司る。一時の不在が夢として理解され、消失した状態が死である。したがって人の一生を通じて村人たちはしばしばクワンの強化儀礼を行なう。出産や病気に際して、出家の式、結婚式、家建て

の儀礼のときに、また長く村を離れた人が帰村した場合などにはクワンの強化が行なわれる。

儀礼のリーダーはやはり村の最長老者であり、村長は司会役を演じ、配下が牛を料理する。式にあたっては、高杯の上に青銅製の器をのせたものを準備する。供物は二種類あって、一つはクワンに捧げられる。テーワダーのためには、タバコ2本とベテルナットをバナナの葉に包み、ローソク2本と共に御神酒をいれた瓶の上に立て、器の

中央に置く。クワンに供える食物としては、バナナ4本、卵4個、餅米を丸めたもの4個を瓶のまわりに4ヶ所に分けて置く。器内の敷物としては、バナナの葉で編んだもの4枚を使用する。普通は、この容器の前に2組の男女が坐る。

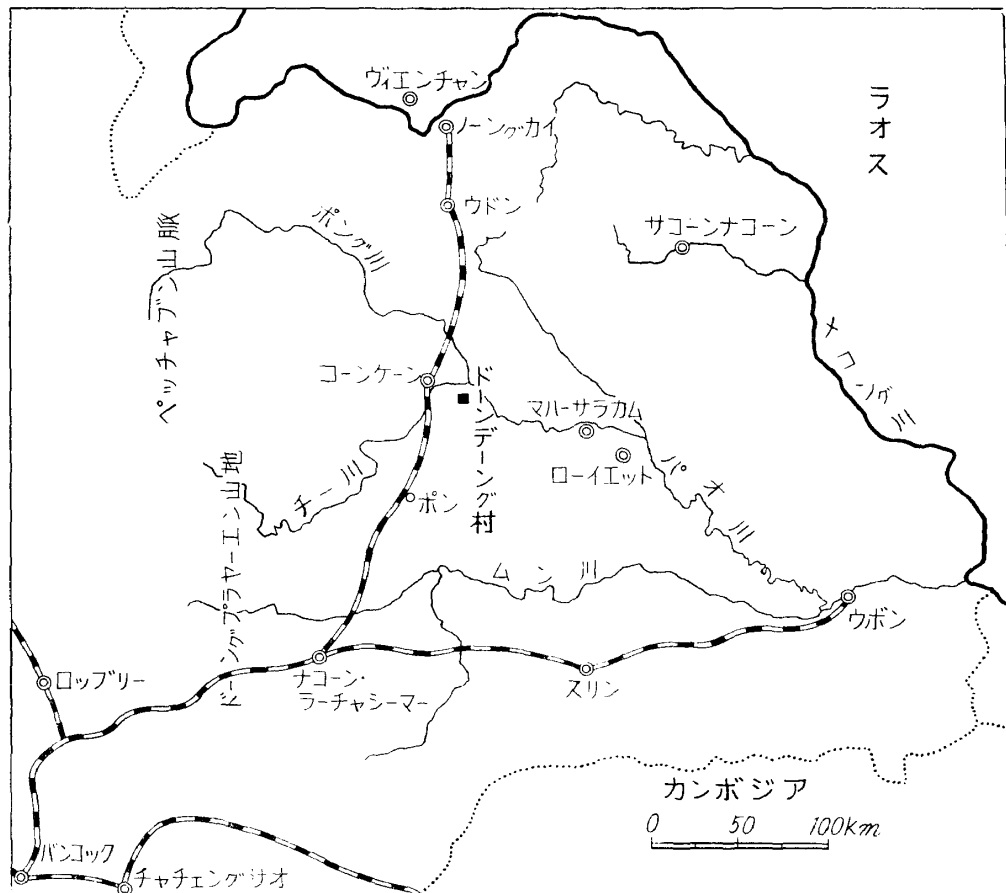
儀礼は、二つの要素から成っている。一つはクワンを呼ぶ呪文であり、他は社会的要素である。リーダーは先ずテーワダーを呼び、クワンの強化を祈る。続いて呪文に移るが人により内容は多少異なる。以下内容を紹介しよう。季節感があって興味深い。「旧暦6月が来ると新しい年が始まる。雷と稲妻を伴ない、雨は花を潤おす。露のために魂は寒さにおびえる。魂よ、おいで、衣服をまとめてあげよう。主の頭にとどまり、遠くへ行かないでおくれ。香のよい花レーテー、マーテー、ラガーの花も咲きほこっている。テーンチャムピャの花も地に咲きみだれている。谷の下は明るい。お前が遠くはなれると、母親は心配して嘆く。クワンよ、森の中を迷うことなかれ。主の頭に戻り、龍と戯れることなかれ。クワンよ、安心してこちらにおいて。櫛も衣類もある。香のよい木チャンダイやチャンホームもある。すべてお前のために用意してあるのだから。ベテルナット、バナナ、砂糖きび、ココナツ、カレー・スープ、それから鳥も。急いでおいで、急いで。6月の末は尾長猿が吠える。外は雷と稲妻ばかりだ。クワンよ、主の頭にとどまれ。宙に迷うことなかれ、宙に迷うことなかれ。空には鶯がいる。遠くへ1人で行くな。魂よ、戻り来たれ。卵もあるし砂糖もある。来たりて食らえ。来たれ。そして安らかにと

どまれ。5つの悪霊に打ち勝て。クワンよ来たれ。クワンよ来たれ。」クワンのあとには本人の名を付してひとしきり大声を出して呼ぶ。

呪文が終ると、リーダーに続いて村人達が近よりそれぞれ糸を両腕に巻きつける。同時に無事息災を祈りながら合掌する。さらに援助のしるしとして幾ばくかの金を器の中に入れる。その間40分位、当人は両手を差出し、村人の言葉に応えるために、その両手をわずかに上にあげる。手の上には餅米がのっている。誰が糸をまきつけるとはかぎらない。それは親戚であり、知人であり、よき友である。この間に当事者は多数の情愛を感じて一種の安心感を覚える。と同時に、そういう人達とは生活を分かちあってもよいという感情に駆りたてられる。糸の数は50本であった。援助金は13パーツしかなかった。儀礼の心理的効果は、当事者が真剣であればあるほど大きい。その儀礼が終わってからは、相互にいっそう親近感を抱くようになったし、また村のリーダー格の1人が進んで案内役を申し出てく

れている。私たちは、父親の尊称を付して彼を、ポー・ルンとよんでいる。

村内の社会組織の重要な要素はやはり親族関係である。実際に親族関係がなくとも、年長者にはポー（父）、メー（母）の尊称を名の前につけてよぶ。親族名称は、父方、母方においてほとんど差異がない。曾祖父の代においてはプー・トウアッド（曾祖父）とヤー・トウアッド（曾祖母）しかなく、父方、母方に適用される。祖父母の代においては、ポー・プー（祖父）、メー・タウ（祖母）が父方、母方に適用される。祖父母の兄弟姉妹の年令順位を示すためにはヤーイ（年長）とノーイ（年少）を付して区別する。父はポー、母はメーという。父方、母方とも父母の兄はルング、姉はパーである。但し、父の弟、妹はそれぞれアール、アールであるのに対し、母の弟、妹は共にナーである。この世代の年令順序は次の世代以下にもうけつがれるから、ルングの息子はやはりルングであり、娘はパーである。パーの息子はルングであり、娘はパ



一である。世代間の区別をするために、父母の兄弟、姉妹の場合は各語の前にポーないしメーを付し男女の区別をする。父母の兄弟姉妹の子供に対しては各語の後に名を付して使用する。自己の子はルーグ、以下ラーン、レーン、ローンとなる。自己の兄弟、姉妹はビー、ノーングであり、その子はラーン、以下レーン、ローンで終る。

興味をひく点をあげるならば、第1に父方の兄弟姉妹に対しては四つの言葉があるが、母方の兄弟姉妹に対しては三つの言葉しかなく、男女とも母より若い者はナーである。第2は、父母の世代における年齢区別がそのまま、かれらの子孫に踏襲されていることである。具体的な例は今あげることが出来ないけれども、親戚中における親近性の順位は、第1に兄弟姉妹、第2が母方の親戚、第3が父方の親戚、第4が妻の親戚である。系譜集団や民族は存在しない。ただ次にも記すごとく、夫は妻の両親と生活する機会が多く、したがって子供は母の両親や兄弟姉妹と生活する蓋然性が大である。

この村の婚姻年齢は男性の場合、だいたい21才から23才であり、女性の場合は18才から20才位である。ほとんどの男性は結婚前に僧としての勤めを終えている。婚姻は相互の愛情が主となっているらしいが、結婚式のためには仲人をたてる。シン・ソードといい、夫は妻の両親に宝石なり金を贈る。この村では300パーツから2,000パーツまでの変差があるが、平均1,000パーツ位である。この額のかけひきには、仲人と娘の叔父が主役を演ずる。その後、妻方は夫方の両親、親戚に敬意を表して衣類などを贈る。婚姻の式は娘の家で行なわれ、夫は当分妻の両親と共に暮す。その期間については一定の規則はない。幾年、妻の両親と共に生活するかは、田の大きさ、労働力、性格、夫の経済的能力などの要因により左右されるらしい。婚姻前に男が女の家を訪れることはあるが、泊ることはない。

村落の基本的、社会的単位は夫婦を単位とする家族である。しかし実情にもとづいて考えてみると、家族構成はだいたい三つの形態に分けられる。第1は夫婦とその子供からなる核家族、第2は夫婦と未婚の子供、娘夫婦とその子供、第3は田を共有する、より大きな家族集団である。

妻方居住制のため、第1の形態から第2に移行する

ことは容易に理解されるだろう。この場合、夫も妻も田を所有していないから、2人は妻の父母の田で働く。通常、夫は婚姻に際して水牛などを彼の両親から贈られる。かれらは米倉を一つにし、家計を一つにする。やがてこの家族が成長してくると、この夫婦は三つの生活法を考え得る。一つは今までの家族から完全に独立して新しい居を構まえることである。その際、妻の両親から田を譲りうける場合もある。第2は従来通り妻の家に住む。この場合下の子が婚姻して同居する可能性もある。第3は、新しく家を建てて寝食は別にするが、田に関してのみ妻の両親に依存する形態があり得る。したがって兄弟姉妹が婚姻後も食を共にし、家計を共にすることもあり、また田を共通にすることによって一つの生活集団を形成し得る。妻方居住制を前提とするならば両親と姉妹の夫婦とその子供からなる家族形態が生じる蓋然性が大である。もっともこうした家族も、両親の死を契機として消滅する。両親のプリファレンスとして、息子よりも娘夫婦と共に生活することを好むようだし、年上の子よりも年下の子と共に住む可能性も多いようだが、明確なことはわからない。

2日の村入り儀礼の後、主な仕事は世帯調査にある。すでに戸籍は写してあるものの、村内の移動が激しく、未だに正確な人口や家族数さえわかっていない。郡役所の戸籍は区長カムナンの報告を基礎としているが、かれの記入帳そのものが要領を得ない。したがって130軒全戸を訪ずれ、チェックすることにした。質問項目は以下の通りである。1世帯主。2世帯員と続柄。3年齢。4教育程度。5出家経験。6職業。7出生地。8婚入、入村理由と入村の年。9婚姻年齢。10家屋の棟数、部屋数と所有主ならびに獲得形態。11田、畑、庭の所有規模と所有主ならびに獲得形態。12小作関係。13水牛、牛、馬、豚、鶏、家鴨の頭数。14牛車、自転車の有無。15ラジオ、ミシン、柱時計の有無。

今はちょうど安居期に相当し、寺では種々の催しものがある。安居の期間は旧暦8月15日から11月15日までの3ヶ月間であり、20才に達した男子が仏門に入り修業する。村の人達はこの間中、旧暦上弦と下弦の8日と15日に寺に詣で、僧に食物を進呈し徳を積む。トード・ティアンと称して蠟燭を奉納する行事が各村で順番に催おされる。遠くの離れた村と昔からこうした

行事を交換している場合も存する。行事に参加する村人は、年寄りと若い青年男女と子供が多い。若い人達にとってはやはり一つの楽しみであり、太鼓などをたたいて行列の先頭に立つ。その他今まで見た行事には、ブン・サードといふ村の人達がマットを編み、寺に寄進し1年の行事費にする催しがあった。旧暦10月15日は祖先の霊をとむらう日であって、カウ・サーグの日といわれている。菓子類を用意し、様々な食物を作って寺に詣で、僧侶に食物を捧げた後、寺の周囲にある木の根元に供物を捧げる。父母の霊が木に訪れるからである。

安居期が終るとやがて稲刈りが始まる。しかしながら今年は雨が少なく早稲の量は少ない。事実、第1回目の旅行から定着までの間、雨に煩わされたことはなかった。どの田も全く水がなく、耕作する姿がみられず、農民達は出小屋に出てはむなく雨を待つ風であった。しかしひとたび雨が降れば田や道路は水浸しになる。この地方の稲作は完全に天候に支配されてい

る。しかしまだ遅くはない。安居期が終るまで田植えが可能であるからである。その頃までは村の男達も村の外に働きに出ることはない。女達はマットを織るのに忙しく、男達はその材料になる草を採集するために沼沢に出かける。それを売って米を買う金をためる。この村では、7月、8月、9月が1年の中で経済的にいちばん苦しい。それはちょうど稲刈りの前であり、ジュートの収穫が終って、かなりの月日が経った頃に相当する。

調査すべき問題は今山積みになっている状態である。それも徐々に解決していかねばならないが、当面の主な仕事は世帯調査にある。来月の半ば頃には一応終る予定である。村の概観としては不十分であるし、また片寄りがあると思われるけれども、以上いままでの活動状況を交えながら、村の様子を記したものである。

9月27日コーンケーンにて

棚瀬襄爾先生をいたむ

人生五十年とはよく言われますけれども、現代の世では考える必要もないことと思っておりました。毎週木曜日、先生は文学部での演習のあと、今夏自ら四カ月にわたって参加されたマレーシア現地調査の調査票集計結果に目を通され検討されることになっておりました。十二月十日の朝、先生はいつまで待っても研究室へお姿をお見せになりませんでした。そのとき、先生の身に何がおこっていたかは想像もしませんでした。

先生は京都大学東南アジア研究センターの設立に、当初から非常な精力をお注ぎになりました。そして、この夏にはセンターの中心的な計画の一つであるマレーシア・インドネシア計画の最高指導者として、自ら予備調査に出発され、マレー半島北部の小さな田舎町とその周辺の村落とを調査地を選んで、後続の調査隊員達をお迎えになりました。住み馴れぬ家屋、変化のない食事、雨水を煮沸した飲み水、そしてやけつくような太陽、先生は不眠になやまされながらも、自ら歩き廻って意欲的に資料をお集めになりました。学者としての生活に油ののりきったお年とは言え、肉体労働に近い調査活動は、先生にとっては余りにも厳しすぎました。そのときの先生の御無理が今日の悲しみにつながっているのではないかと思えてなりません。四階の研究室への往復でさえ息切れを感じると言われていた先生でした。

先生は余りにも大きな重荷を私達に残して御他界になりました。私達はどうかしてそれに耐えようと思えます。そしてそれを先生の目ざされた目的地へと力を尽して運んでいこうと思えます。

(坪内良博 記)